

だったが、労働で外に出た時、山野草を採取したり、一般ロシア人からバター等ももらったり物々交換したりして、栄養を補給していた。

労働は木挽きと泥岩運搬作業の繰り返しで、木挽きの作業中転倒骨折、今でも右手が左手より短く、当事を思い出すことしばしばである。

二十一年一カ月後、エラプカよりナホトカ経由して興安丸にて函館に上陸帰国した。

家族と対面した時、栄養失調のためかよく肥っていて驚いていたことを思い出す。

翌年歯科関係の学校に入学、現在も現役にて歯科医業に、できる範囲で頑張っている。

三、結び

我々は終戦の詔勅どおり、堪え難きを堪え忍び難きを忍ぶ生き方を立派に実践してきたと自負すると共に、一部を除き反共愛国心をもって帰国し、帰国後は我が国の発展のために多大の貢献をしてきた。この事実は日本民族の歴史で忘れてはならない事実としていつまでも留めておかれるべきであらう。

捕らわれの歌

愛媛県 竹内一利

昭和二十(一九四五)年十月八日、満州国明月溝で武装解除され、ソ連の貨物列車に荷物同然に乗せられ、二泊三日かかって到着したのは、ハバロフスクから更に百キロの奥地、コムソモリスクの山中の捕虜収容所である。

これらの記録は、軍隊手帳の余白に書き綴ったもので、帰国の時の身体検査で没収されることを防ぐため、眼鏡の蔓に巻きつけて、その上に木綿糸を巻き、眼鏡の蔓が折れたのを修理しているように見せ、帰国後アイロンをかけて判読し、清書したものである。

捕らわれ日記より(抜粋したもの)

幾度か筆とらんとは思へども

余りに悲し捕虜の吾が身の

(昭二十一年四月二十三日)

昭和二十一年元旦(火)

捕虜と名づけられ二年目、八千万同胞、三千年來かつてなき正月を迎う。万感胸に迫りて言を不知。給食は殺人給食、何ら正月の感なし。ロシア人も何ら行事を行う様子なし。何の為に彼らは生きているのか。死の町！ 淋しき町！ コムソモリスクよ！

前年度は大晦日まで作業をした。

三月五日(金) 晴

亡き父上様 (注 昭和十九年五月十七日死亡)

戦は敗れました。兄上は尊い大東亜の礎と思いの外全く残念でしょう。(注・兄は昭和十九年六月四日、ビルマで戦死)

一利のみが現世唯一人の男となり、早く帰って母上に孝養したい一念です。総てのことが水泡です。余りにも憐れな試練でした。然し必ず再建いたします。地

下より見守って下さい。南無阿弥陀仏 々々々々々々

四月二十三日(火) くもり

近頃「諦観」ということ思うや切なり。抜け出せない收容所。抜け出せない收容所。苦悩に思うよりも「安心立命」の悟道、無我茫然たれ！

五月二十七日(月) くもり

思想―混沌たる今日、宣伝員の言葉に左右される大衆。時代に応じて変心するは信念に非ず。今ここに楠公、松陰を論ずるも、左派との論争のみ。黙して語る不可。機微に應ずるは賢明の策なり。

六月二十九日(土) 晴

指揮者は、ソ連の要求を主体とするや。日本人を主体とするや。ノルマ(%)を欲しロシアに共鳴するが如きは、余の最も忌避する所なり。日本婦人の着物を仕立替えして着るロシア人マダム。日の丸のついた無残な戦車を見よ。この仇打たずにおくべきか。

(日記は用紙もなくなり、昭和二十一年九月中旬を以て中止としたり)

捕らわれの歌（一部抜粋したもの）

今宵見る月の姿のうつらまし

心や通へ 天の群河

（昭二十一年四月二十三日）

この雲のつづく彼方になつかしの
祖国ありけり たらちねの待つ

（九月二十一日）

眼を閉じなば山川畑木々もみな

さやかに見ゆる年老へる母

（九月二十三日）

このことの昔語りとなる日をば

待ち待ちに待つシベリヤの空

（九月二十五日）

今年こそ故郷見ゆると思ひしに

今はかなわじ秋風の吹く

行く雲の心しあらばわが思ひ

のせてやらまし 故郷の空

（十月八日）

いろり火を思ひ出すよなたき火かな

ふるさとを語る兵等に紅葉かな

（九月二十日）

きの子取り幼き山の友恋し

（九月二十二日）

かさと下駄で行きたし今日の雨

（九月二十三日）

北斗星仰ぎて恋し天の河

（九月二十四日）

風はれて知る美しき紅葉かな

霜枯野ほかむりして行く林野道

(九月二十九日)

初雪の降らば悲しき祖国かな

(十月一日)

苦しみの待つ一日毎の紅葉かな

(十月八日)

サイレンの上を飛び行く雁の群

思ひ出を乗せたや霧の列車かな

(十月十五日)

虜囚の新聞

昭和二十一年の春頃になって、タブロイド版の『日本新聞』という活版刷りの新聞が配布された。おそら

くハバロフスク辺で印刷されたものであろうが、現在まで国民には知らされていなかったことや、民主化へのための意図的内容であることはもちろんであるが、この現物を持ち帰ることは遂にできなかった。

但し「俘虜の内務規定」なるものは、どうして持ち帰れたか今では忘れてしまったが、西洋紙大一枚のものを原文のまま整理することができているが、省略する。

「給養定量表」(昭和二十二年四月一日、日本新聞)というものがあるが、「パン・米・肉・魚・油・砂糖・茶・塩・野菜・味噌・巻タバコ・マッチ・石ケン」と小さいもので将校と下士官、兵に分けて示されているが、その通りだったことは一度もなく、「殺人給食」というものであった。